

『地域文化観光論 新たな観光学への展望』
(橋本和也著・ナカニシヤ出版・2018年) 講評

本書は、「地域における人々の活動と、地域から外部に向けて発信する活動」に焦点を絞り、「地域文化」を対象とした観光についての考察を展開する著作であり、また、「筆者にとっての学問的な総括の一つ」と位置づけられている著作でもある。

本書の第Ⅰ部は、理論的探究篇を構成していると言える。具体的には順次、「真正性」や「地域文化」という基礎的諸概念に関する理論史を踏まえた再検討(第1章・第2章)、ANT(アクターネットワーク論)の「地域文化観光」への活用の有用性の検討(第3章)、「地域文化観光論」と「観光学」という、「部分」と「全体」との繋がり方に関する検討(第4章)が展開されている。

第Ⅰ部については、各論点に関して、著者独自の理論的貢献が為されている点が高く評価される。具体的には、第1章では地域文化観光における主観的真正性の重要性が指摘されるが、観光研究の初学者にとっては真正性という研究主題への適切な導入にもなっており、この観点からは教育的意義も有している点が意義深い。第2章ではアパデュライやギアーツの議論を参照しつつ、「地域文化」という概念が明瞭化される点や、地域文化観光における「真摯さ」という視点の導入の有用性、外来文化の「ローカル化」と「土着化」を区分した上で各地域の文化の「真正化の過程」を解明する必要性が主張される点が独自の理論的達成である。第3章ではラトゥールらによるANTの観光研究への活用について、ANTの源流をなす哲学者ライプニッツやセールスの議論まで遡行し、ANTへの批判にも目配りしつつ考察が進められており、特に、外来文化の「ローカル化」や「土着化」の過程を分析する別の視点としてANTを活用できるとする提案や、「新たに立ち上げられた観光地」や「まだ安定化していない事例」の調査・分析へのANTの活用の有用性が指摘される点が独創的である。第4章ではストラザーンやカントールを参照しつつ観光学における「部分」(観光研究における一分野の研究)と「全体」(観光学という全体的研究)との繋がり方が検討され、「個々のうちに全体像がイメージされ全体のなかに個々がイメージされる<部分的つながり>モデル」が提案される。著者のこの主張の独創性も高く評価されるが、論理的に更なる解明が必要と思しき点も含まれており、この点は後続研究者による更なる批判的研究が必要でもあろう。また第4章では、ANTを活用した大学における観光教育の可能性が示唆されている点も特筆に値する独自の知見である。

以上のように、第Ⅰ部は全体として、基本的諸概念や研究・教育方法に関する著者独自の顕著な理論的貢献を示していると高く評価される。本書の後半をなす第Ⅱ部～第Ⅳ部は、第Ⅰ部の理論的探究が具体的な事例調査と組み合わせられ、理論的概念を用いて各事例が考察されるとともに、逆に事例分析に活用されることを通し、理論的概念の内実や機能が更に考察・展開され、充実していく構成となっている。

具体的には第Ⅱ部は、地域性や地域文化の創造という観点から、「九州ツーリズム大学」

と「北の観光まちづくりリーダー養成セミナー」の事例が分析・考察される（第5章・第6章）。二つの事例の取組みの詳細な経緯や様々に関わる人々の活動、地域文化観光としての成立の具体的あり方が紹介されるとともに、理論的には、これらの事例が「観光まちづくり教育」の議論や観光まちづくりの段階論と関連させて検討される点が特徴である。第Ⅲ部は、ANT理論と地域化論の観点から、「越後妻有 大地の芸術祭」と「瀬戸内国際芸術祭」が考察される（第7章・第8章）。第Ⅰ部で述べられた、新たに立ち上げられた観光地の分析へのANTの活用の有用性が検証されている点や、「土着化（＝完全な地域化）」の事例の発生が指摘されている点に加え、理論的には、モノが人に対してエージェンシーを発揮する際に必要となる要素として「ものがたり」の存在を指摘する点が著者独自の貢献である。第Ⅳ部は「まとめ」として3章に分けて「交流によるまちづくり」と「地域化」論に関する考察が展開されている。観光人口ではなく交流人口の受容と活用を目指す長野県小布施町の事例の議論（第9章）、本書で扱った各事例を踏まえての「地域化」に関する考察やモノがエージェンシーを持つことの内実の考察（第10章）、アフォーダンスと地域芸術祭との関係性や、「部分」としての地域文化観光論と「全体」としての「観光学」との繋がり方の議論（第11章）など、論点は多岐にわたるが、いずれも著者の理論的研究と綿密な事例調査との高い次元での総合の上で議論が展開されており、後続する研究者に多大なる刺激と示唆を与えらるると言える。

以上より、本書は全体として、観光学の発展に大きく寄与する著作と判断できる故に、観光学術学会の「学会賞」に十分に値すると評価される。

目次

第Ⅰ部 「観光学」と「地域文化観光論」：観光学への展望

第1章 大衆観光から「地域文化観光」へ：真正性への問いかけ

第2章 「地域性」「地域文化」の創造，そして「地域文化観光論」へ：「地域化」と「真正化」

第3章 アクターネットワーク論（ANT）と「地域文化観光」

第4章 「地域文化観光論」と「観光学」：部分と全体との「つながり合い」

第Ⅱ部 「地域文化観光」論：地域性，地域文化の創造

第5章 「九州ツーリズム大学」の試み

第6章 二つのツーリズム大学：「北の観光まちづくりリーダー養成セミナー」と「九州ツーリズム大学」

第Ⅲ部 「アクターネットワーク理論」と「地域芸術祭」：「地域化」の過程

第7章 「越後妻有 大地の芸術祭」

第8章 「地域文化観光」としての芸術祭：「瀬戸内国際芸術祭」と「大地の芸術祭」

第IV部 「交流によるまちづくり」と「地域化」論：まとめ

第9章 交流人口を活かす小布施

第10章 交流人口の「地域化」

第11章 「観光まちづくり」と「地域文化観光」